目　次

凡　例

一九三三年

一九三三年の所感五点……3

一九三五年

明治政府の秩禄処分とその影響……25
——武士階級の階級分化過程に関する一考察——

一九三七—四〇年

法理研究会記事……61

一九四四年
昭和十八年度最終講義（昭19・1）における学生を送る言葉……77
一九四六年
憲法研究委員会第一次報告……81
孫文と政治教育……85
政治とは何ぞや……117
近代日本政治の諸問題……155
ホープに就て……227
一九四七年
現代政治学の課題……233

一九四八年
政治嫌悪・無関心と独裁政治 …… 289
民主主義政治と制度 …… 307

一九四九年
ヨーロッパと日本 ――イデオロギーの問題―― …… 321
ファシズムの歴史的分析 …… 359

解　説（平石直昭） …… 403
文献解題（黒沢文貴・山辺春彦・川口雄一） …… 419

（11）

つぶりほのめかして「学ばれぬ程性」を示す。

角に

その會の指導、目

的科学、経済学等の専門及び各種

門に於ける現下の中心問題を挙げ、

一聴して、この會員は仮して一般的のも

ののみし、指導者事例研究家に限

定され従ってその発展性に非常に

限度のあるに相違ない。

知恵用

しかるに、

貴増加率は驚くべき程度に達しています

以て知るに足った旨を述べ、

「これに力を得て我々は益奮起し、

性格論によって科学の正しい立場

を……といいかけた時、正にこ

の時聴壇の左に、今迄何をうそぶく

といった風な顔で笑って聞いてゐ

た署長の鈴がガチャリと響くと同時

に「中止！」とめれる様な声が聴衆の

度肝を抜いた。

泉閣にあつけに

とられた聴衆の方に眼をやったが、

すぐそのまゝ、聴衆のあてつける

銀座 伊東屋製

15 × 20

「一九三三年の所感五点」より

4

それはまがいもなく、私の過去十数年の生涯中曾てなかった、又これから先の私の生活中にも恐らくあるまいと思われる程の激動を私の心に起した出来事である。二十(ハタチ)といえば通例人が人間として精神的に肉体的に一先(ひとま)ず完成して幼年―少年を通じての依存生活を清算するに至るべき過渡をなす時である。この人生に於て過渡としての段階に相当する時に恰(あたか)もこの大きな事件を体験した事は私をして、そこに云い知れぬ或る意義深きものを感ぜしめるのだ。

桜も漸(ようや)く、固く結ばれた唇を開こうとしている四月十日だっだ(た)。私はホッケーの合宿があるため一日から寮にとまっていた。休暇中の寮――それは確かに「廃墟」という字を言葉の最も忠実なる意味に於て具体化したものとしか思われない。賑やかなさんざめき、寮歌のひびきと下駄の音がからみ合いながらしかも渾然調和して耳にひびいて来るあの平生の寮から、今やあらゆる「動」の姿は消えてただ長細い朽ちかけた積木細工が、漸く青みがかった大地に死の沈黙を守っている。その中に私達十一人の殆(ほと)んど唯一の「生」がいるのだ。これで私等が無聊(ぶりょう)に苦しまず、刺激を求めずに居られたらそれこそ不思議というものだ。練習が終ってからは、始めの二三日こそ、部屋で友同志興じ合って躍動する生の力のはけ口をお互の間に見出していたが、やがてそれは外の刺激を求めての爆発とならなければやまなかった。私達は手あたり次第映画を見た。あてもなく無暗と歩き廻った。誰

もその様に日を送る事の如何に価値のない恥ずべき生活であるかを痛切に意識していた。が「廃墟」の中でまとまった読書にいそしむなどという事は問題にならなかった。畢竟〔ひっきょう〕そういう生活は我々にとっては、環境のもたらす必然だったに違いない。だから八日頃だったか、いつもの散歩の途上、棚沢〔本郷の本屋〕の前にかかっている「唯物論講演会」という広告が刺激に飢えている私の眼を異常に鋭く射たのは当然だった。すぐさま私の眼は紙の上をすべった。講演者は？――長谷川如是閑〔大正から昭和初年のリベラル左派の論客〕、服部総之〔そうし〕〔マルクス主義歴史学者〕、岡邦雄〔唯物論研究会の創立者の一人、前一高助教授〕……よしっ、時は？――四月十日午後六時より、場所は？――仏教青年会館！　近い！　これだけをすばやく見て取った時に私の心は既に之に行くべく定まっていた。……

四月十日になった。外のものは大部分邦楽座〔旧麹町区、現在の千代田区に所在、丸の内松竹の前身〕へ「巴里―伯林」を見に行く事になった。私は心大に動いた。友達は勿論一諸〔緒〕に来いとしきりに誘った。が、今迄、意識しつつも、学的に無意義な生活に甘んじていたという良心的矛盾が、たとえ一端なりとも、この会を聴く事によって止揚〔しよう〕せられるという感が次第に何よりも強くその時の私を支配するに至った。かくて遂に私は友と別行動をとる事に最後の決定をしたのだ。この二つの道の中、他をとったとしたなら私はここに今、筆をとる必要もなかったであろう。之をしも運命というか。しかしすべては、運命として片付けてしまうべくあまりに複雑な感慨を私の心に強いるのだ。

夕もやが漸くしのびよって来る頃、私は仏教青年会館の前に立っている自分を見出した。私は入口の両側に二

人の警官を見た。がそれは私の心に何等の動揺を与えなかった。何か講演がここである時に偶然通り合せて既に同じ光景に接した事が一度ならずあったから。……私は躊躇せず進んで警官の間に立った。二人は両側から私のポケットのあたりをなでまわした。流石（さすが）にいい気持はしなかった。「よし」という声に、救われた様に、私の身体は「こちらへ」という左前方からの女の声に吸い付けられて行った。事実、この時には既に無意識的な、恐怖心と羞恥心との交錯が完全に私を支配していたので、私の周囲のものはただ漠然と意識されるだけだった。誰が、何人、そこにいるのかも分らずなんでも早くこの空気を脱して中に入りたい心がはやり立った。二十銭を置いて、さし出された手から入場券をつかむや隔幕をくぐってホッとした。ベンチがずっと前方へ続いていて、前の方の三四列は既に占められていた。案外来て居ないなと思いながら左側のベンチに坐った。あたりの人を見廻して見ると大学生が多かった。一高〔第一高等学校〕のものは外に見当らなかった。だがその中にもベンチの空席は見る見る塞がって行った。私は顔を動かすのを止めて手に握っていたプログラムに眼を向けた。如是閑の挨拶に始まって、「自然科学と唯物論」とか「初期資本主義の研究」とかが目をひいた。中にも貴司山治〔プロレタリア文学の小説家・劇作家〕の「マルクス伝」という題に最も通俗的な好奇心を感じた。こう見てくると「唯物論研究会」〔一九三二年一〇月結成〕といってもそれは殆んど「史的唯物論」のそれだなと漠然と感じられ又それが当然の様にも思われた。すると又私は頭をあげて周囲の聴衆に視線を復した。この人達も程度の差こそあれ、皆リンクスゲナイクト〔linksgeneigt 左傾的〕なんだろうという目で一人一人の風采態度を見る事にくすぐったい様な興味を覚えたのだ。そうしてその興味はまもなく、彼等の会話から左翼的言辞の断片なりとも聞き取ろうとの例の分（わけ）のわから

ない欲望にまで高められた。だが私の視覚聴覚の及ぶ範囲ではまるでその望は裏切られた。すると私の心には失望が感じられると同時に何かしらホットした様な意識が心の一隅に頑強にその存在を主張し始めた。私は私の試みにひそかな悔みを覚えながらふと後をむいた途端、私の視線は斜右後の方に(ママ)に頬杖ついている男のそれとバッタリぶつかった。

広い光った額と射抜く様な眼に、瞬間私は佐々木〔喜市。一高の生徒〕主事を見た。反射的に目をそらせて頭を反したが、心は異常に乱れていた。背中にやけつく様な男の視線を感じながら私は考をまとめ様と焦った。「佐々木主事がこんな所に！」……「まさか……でも左翼残党狩りのために来ないとは限らない……なに、主事なら主事でいいさ。俺は別にメムバーでも何でもないんだから……〔一〕

こうして私は確信と不安を心の中に闘わしていたが、どうしても主事ではない様な気がしてならない。

恰度(ちょうど)小便を催したので私は席を出て何かしら面はゆさを感じつつ列の間を通って講壇わきの便所へ入り、出て来て席へ帰りすがらその男を見つけ出すと、彼は今度は講壇の方へ目を向けていた。それで私は稍々(やや)落着いて段々近づきながらよくその顔を見てみると驚くべき程の佐々木主事との類似の中に、侵しがたい相異のひそんでいるのが認められた。私が自分の席の列に達するやその男は又もや鋭い視線を私にそそぎかけたが私はもう驚かなかった。ただ何をこんなにジロジロ見やがるんだろうと半ば気味悪く思い、半ば癪に障るだけだった。……

間もなく開始のベルがけたたましく鳴り渡った。後を見渡すと(あの男の目はまだ「だに」の様に私に吸い付いている！)会場は蒸せ返る様な大入だった。それより驚いた事には何時の間にか会場のぐるり及(および)席列の間々に

一間位置きに正服のあごひもがずらりと立っている事だった。

たかが唯物論講演会にこんな大げさな警戒！　非常時日本とは非常識日本の謂(いい)なのだろうか。私にはただ本富士署の神経過敏が滑稽なものとしか映じなかった。

と拍手がどっと起った。司会者に紹介されて長谷川さんが演壇に進み出た。久しぶりの懐しさと、ある誇らしさを以て私はヂットあの特長的な口元に目を注いだ。……

「今晩は唯物論研究会の第二回公開講演でありまして、それに先立ちまして私から簡単に唯物論研究会の目的とか会員数、活動状態等を御報告しようと存じます。……〔一〕

およそ情熱とか興奮とか名のつくものは前世に忘れて来たかの様な例の態度と音調ではあったが、彼の一語一語には動かし難い確信が脈々と波うっていた。こうして彼は、唯物論研究会は純然たる学術機関であって何等実践的意義を持たぬものである事(ここで彼は一般概念に従えば純学術的なるべき所謂精神文化が今日では却って政治的意味をもっているという事をチョッピリほのめかして、争われぬ如是閑根性(？)を示す)再(カ)にその会の哲学、自然科学、経済学等の部門及びその各部門に於ける現下の中心問題を挙げ、一転して、この会員は決して一般的のものでなく、特殊な専門(門)研究家に限定され従ってその発展性に非常な限度を見越さなければならぬにも拘らず創会以来会員増加率は驚くべき程で現在は実に百を以て数うるに至った旨を述べ、「これに力を得て我々は益々奮起し、唯物論によって科学の正しい立場を……〔二〕といいかけた時、正にこの時！　講壇の左に、今迄「何をうそぶく」といった顔で笑って聞いていた署長の帯剣がガチャリと響くと同時に「中止！」とわれる様な

声が聴衆の度胆を抜いた。如是閑はあっけにとられて署長の方に眼をやったが、すぐそのまま、聴衆のあてつける様なすさまじい拍手に送られて引込んだ。すると署長は何思ったが悠然と演壇に歩を運び聴衆に向って開口一番、

「本集会の解散を命ず！」

之には私は呆然たるより外なかった。第一私がここへ来る動機そのものが必然的なものではなかったし、従って無産党の演説会を聞きに行く様な心構えはまるで持ち合して居なかった。又入口の検査や中の警戒の厳重さ及プログラムの内容など私には多少意外でありまた稍々不安な気もしたが、精々「之は中止があるな」と思った位で、講演に入らぬ中に、中止、つづいて解散になるなどという事は僕の想像から最も遠いものであった。……

聴衆は仕方なく腰をあげ始めた。一時、聴衆をさっと襲った不服と憤懣の色が、狂的にひきしまった全警官の顔面筋肉に圧しつぶされて、重苦しい雰囲気がかもし出された。私もこの空気に向って、二十銭只取られ、「巴里—伯林」も見損ったという可愛いい不満を人並に吐き出しながら、皆についてゾロゾロ出口の方へ歩み出た。すると出口の所が妙にザワついているのが目についた。警官が五六人固まっている。と、私はギョッとして立竦んだ、……その警官だちに何やら指図している者こそ誰あろう、あの「第二世佐々木主事」その人なのだ！　彼奴は警察のものだった！　だが私に驚く暇も許さず、次の呪われたる瞬間、男の例の射抜く様な凝視はピタリと私の上に坐っていた。

「おい一高！　ちょっとここへ来い」　聞えるか聞えぬかの声で彼は一つ向うの列から呼びかけた。私は信じ切